山形大学附属郷土博物館報 3

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　1976 11. 1

目　次

提　　言 …… (1)
館名と規則　——現在のそれは使命に適合しないのではないか—— …… (1)
阿古屋の松 …… (2)
博物館・美術館でのある点描 …… (3)
歴史史料と現地演習 …… (5)
バイソンからホログラフィまで　——イリノイ大学のミュージアムのこと—— …… (6)

提　　言

館長　工　藤　定　雄

本館が「博物館に相当する施設」として，国の指定を受けたのは，戦後間もない昭和27年である。（法29条）文化国家としての復興の願いを承けての施策に基いているが，大学の前身時代における実績を踏まえ，新しい発展が期待されたのである。昭和30年12月「大学の附属施設」として認定され，（文部省告示108号）昭和48年度から運営費として，一部予算措置が認められた。これは大学がもつ総合施設としての機能の充実発展の線に沿う進路を，着実に推し進めたことによると思う。地方大学の急務は，学部・学科・研究室の整備，特色の発揮にあることは言うまでもないが，異地区キャンパス間の研究・教育上の交流，学部・学科・研究室の学際的機能の拠点としての博物館に対するる要請は，一段とたかめられているといってよい。それには二つの著しい実績がみられる。

一つは，最近教養部において，国文・歴史（日本史）中国文学研究室が各学際的領域を補完協合する如き構想を以って，「奥の細道」の総合コース教育の実践を進めている。詳細については，ふさわしいレポートに期待し省略するが，このような実践は，物理・化学・生物・地質研究室による理学コースの中の「水」の指導にも実践されている。研究施設として充実され，整備された博物館が，このような複数学部・学科にまたがる総合教科の利用拠点たり得るものと考える。

第二は，各研究室の特色ある研究成果の保管，退官教授の収集資料の継受・保管・公開利用の場所として，博物館が，これまた他に求められないコーナーを提供していることである。館報創刊号に投稿されている本館運営委員大津教授の「サンリンガエル」（杉林蛙）の個体標本の保管についで，教授の高い提言実績がある。教授は現在，現役として教育・研究にあたられているが，学界でも特色ある研究・標本（資料）は，現役・退官後を通じて，安全で永続的な保管と陳列のよきコーナーであるとして，博物館に移すという提案をされ，すでに実践されているのである。次に考古学のように，退官教官の業績・収集を継受する学部・学科・研究室の実現が困難である領域において，学内外・学生の広い要望にこたえる学際学，例えば文化人類学構想による考古学の研究・資料保管・公開の場所として博物館の果たす役目はふさわしく，かつ新しい大きな構想といえる。今のところ，この要望にこたえる施設は博物館以外には考えられないのである。

以上，学内の研究・運営上の問題が，本大学の当面している切実な課題であると共に，ひろく全国の大学においても緊急のことになっている。さらに，在任中の貴重な収集資料で退官後，後任教官の専門に直結しない保管が現実の問題として大きい。大学には今のところ，その資料研究成果の利用についても確かな提案がない。当博物館の運営・充実策の中で考慮される問題の一つとなり得るように思う。

（教育学部　教授）

館名と規則

——現在のそれは使命に適合しないのではないか——

学芸員　川　副　武　胤

館報第2号に寄せられた工藤館長の「運営の方向」によると，昭和48年以来，運営費として一部予算措置が認められた点は前進であるが，今後本館の必要としている人事・予算的措置を獲得する為には，現在の「相当施設」から「教育または研究施設」の認可をうけることが必須であるということである。本館の運営が，その大部分を依然として学内措置による予算に頼っているような現状は，改善しなければならないことはいうまでもない。

しかし，これを改善するためには，運営内容を「相当施設」から「施設」に見合うように充実する努力をするに尽きるが，殆んど零に近いような運営費では，「期して待つべし」と手離しで楽観することは思いもよらない。そこで一歩退いて考えると，運営内容の充実の一環として，または運営内容を充実する為にも，金をかけないでできること，またしなければならないことが一つあるように思われる。それは本館の名称，規則，細則等を上の方向に合致するように改めることであって，このことは一見〃形式的〃処置に過ぎないようにみえるけれども，運営上決して軽視できない重要なことであって，俗に「渠成って水至る」という言葉の通り，現段階において無理ではなく，また必要なことであると考える。

山形大学附属郷土博物館規則は昭和二十八年に制定されたものであるが，これに本館の設置の目的，任務を次のように規定している。（第２条）「本館は，博物館資料を収集し，展示して，一般に公開し教育学術および地方文化の向上発展に寄与することを目的とする」これを読むと，「教育・学術」の語もさることながら，これと並んで「一般公開」「地方文化の向上発展に寄与」という面が際立っており，それにかなりの力点が置かれていることがわかる。この規定は制定当時の国勢，地方文化の状況，本学と本館の置かれていた社会環境からみて，もっともな内容であるが，今日では国力の充実，地方文化の向上(例えば県立・市立の博物館施設の誕生等)によって，社会的条件は大きく変化している（その文化の向上の為に本館の寄与して来たところは大きいであろう）ので，最早，特にそのことを謳う必要はなくなったかにみえる。（勿論，郷土性を将来に亘って併せ保持し，地域文化の向上に資することを任務の一つとしてしかるべきであるが。）

次に本学が発足して間もなかった昭和二十八年とそれから二十数年を経過した現在とでは大学自身が変っている。すなわちその内容が格段に整備・充実し，本館に対する学術研究・教育面での寄与も，また期待も大きくなっていると考えられる。

本館の所蔵品に山形県地方の伝世資料，出土資料，採集資料，産出品，製作品等が多いのは当然であるし，そのことをもって〃郷土性〃が存するとはいえるが，同時にこれらは，文書類にせよ鉱物標本にせよ学術性の大きい，いいかえれば普遍的な価値の大きいものばかりである。従ってその普遍性(国際性)という面からすれば，ある意味での〃郷土性〃の反極に立つとさえいえるのである。ようするに我々は，そのどちらに力点をおいて考えるか，つまりどちらに力点を置く方がより本学設置の目的に通う性格づけとなるかということで，ここに一つの選択肢があるように思う。

また大学の学部・学科それぞれの専門分野によっては，考古学，歴史学，地理学，植物学の中のある部門のように，比較的地域に密着してその資料の得られるものもあるが，またそうでない部門もある。後者も長年月に亘る積極的な学術調査・研究活動によって，研究室に収集される資料－〃郷土性〃をもたない－は逐次累積される筈である。

このような学術資料は，それぞれの研究室に保管する方が有効な場合と，より保存・利用にふさわしい資料館・博物館（University Museum）の方が有効な場合とがある。特に永久保存を必要とするような資料については後者の方が有効でもあるし，また必要であろう。

以上本館の置かれている環境や状況を述べて，規則の文面が，現在では必ずしもこれに適合していないのではないかということを指摘したが，参考として東京大学の総合研究資料館（館報１号の拙文参照）の規則を引用してみたい。（第２条）「資料館は東京大学における研究及び教育に資するため，学術研究資料を総合的に収集，整理及び保存し，その有効な利用をはかるとともに，これに必要な施設及び設備を維持し，かつ運営することを任務とする」博物館と資料館では和名は違うが洋名は同じく University Museum であるし，その事業もまた殆んど等しいものと考えられる。（館報１参照）しかしここには「研究及び教育」が前面に出ているし，またそれだけでもある。大学の施設としては当然そうなるであろうが，本館の場合はせっかく相当施設として認められている博物館の活動を将来にわたって維持するためにも「博物館」の名は残したい。その上で大学設置の目的に適う「教育または研究施設」（前述）たらしめる為には，館名・規則双方にもう一工夫が必要であると思うが如何であろうか。

（人文学部　教授）

阿古屋の松

後藤利雄

平家物語巻二に「阿古屋之松」という段がある。鹿が谷の陰謀が露見して，流罪になった大納言成親(なりちか)卿とその嫡子少将成経(なりつね)にまつわる話である。

成親の配所は備前の国有木(ありき)（岡山県都窪郡吉備町），成経の配所は備中の国の瀬尾(せのお)（岡山県都窪郡妹尾(せのお)町）である。父の噂を耳にした成経が，今いる所から父の配所までの距離を尋ねると，警護の者が十二・三日かかると答えた。成経ははらはらと涙を流して，かつて藤原実方が陸奥(みちのく)の阿古屋の松をたずねた時には，出羽国はみちのくから別れていたが，もとは一国であった。備前と備中

も，もとは一国であったのだから十二・三日もかかるはずがない。これはきっと父の居所を知らせまいと思って，でたらめを言っているのに違いないと考え，あとは父のことを尋ねなかったというのが，その段のあらすじである。

その阿古屋の松に関する部分は——実方が老翁に，当国（陸奥）の名所で阿古屋の松という所を知っているかと問うと，翁は「またく当国のうちには候はず。出羽国にや候らん」と答える。実方は名所も知らないとは，世も末だなと嘆いて通り過ぎようとする。すると翁は実方の袖をひかえて，もしかしてあなたは，

みちのくのあこ屋の松に木がくれていづべき月のいでもやらぬか

という歌の心をもって，当国の名所あこやの松と仰せられるのですか。それは両国が一国であった時に詠んだ歌ですよ。十二郡を割き別ったあとは，出羽国にありましょうと語ってきかせたというのである。

同趣の話は，鎌倉時代の初期，建暦二年（1212）から建保三年（1215）の間に成ると言われる古事談にも載っている。

古謡曲の「阿古屋松（あこやのまつ）」は，この話をもとにしたものであるが，実方に所在を教えた老人が，実は塩釜明神の化身であったという点が，謡曲らしい敷衍の仕方になっている。

さてこの「みちのくの阿古屋の松」の歌であるが，平家物語や古事談に語られている通りとすれば，和銅五年（712）九月二十三日，出羽国建置以前の作ということになろう。古事記が成ったのもこの年であるから随分ふるい歌ということになるが，残念ながらそうは思えない。「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」という古今集の歌が，「みちのく歌」と題されていることから見ても，平安時代前期あたりにあっては，なお出羽と陸奥の区別がはっきりしていなかったものと見てよいと思う。周知の通り最上川は出羽国を一歩も出ていない。まさしく一県一大河の珍らしい例に属し，この点「最上川はみちのくより出て（いで）」とする『奥の細道』の記述も誤っているものと言わなければならない。

それはともかく，阿古屋の松は実方の頃から歌枕だったかどうか。それを見るために，果して実方が，千歳山を訪れているかどうかについて考えてみよう。

阿古屋の松を詠んだ歌で，年代の知れる最も古い歌は，「堀河院百首」の

おぼつかないざ古のこととはむあこやの松にもの語りして

という源顕仲（1057—1135）の歌で，長治三年（1107）の詠である。（この歌は夫木集にも載っている。）実方がみちのくに流されてきてから，約百年後の歌である。あこやの松を「実方の頃から歌枕だったかどうかは疑わしい」（古典文学大系「阿古屋松」頭注）とする意見が出るのも，もっともなくらいの年代のへだたりが存している。

そこで先ず，実方が山形県まで来ているかどうかから問題になるが，私は来ていると考えたい。それは実方のあとを追って，はるばる京からやってきた源重之（三十六歌仙の一人）が，はっきり山形県に足を踏み入れ，最上峡の白糸の滝を詠じていることから類推できる。重之集には実方とのふれあいの歌は略されているが，これは憚るものがあって略されたもののような気がする。重之が着いてからの両人は，必ずや行を共にする事が多かったろうと推定して誤らないと思う。京にいても歌人の第一人者ともてはやされる存在であった重之が，わざわざ跡を追ってたずねてきたのである。不遇の実方の感動は，なみ大抵のものでなかったと言ってよいと思う。

実方集にもみちのくでの詠作はほとんど伝えられていない。重之のみちのくでの作品は，多く伝えられているのであるから，実方のも残り得たはずであるが，ほとんどないのは，やはり憚るところがあって残らなかったと思わないわけにはゆかない。

流人に等しい不遇の終末を余儀なくされた実方は，悲劇の主人公である。彼の行状は潤色され，紛飾されることのあるのは事実である。しかし後代人が歌までもふるめかしく創作して，阿古屋の松の話を作りあげたとは考えにくい。最上川をみちのくの歌枕と考えていた平安前期頃までには，この歌も作られていたと見てよいのではないだろうか。

（人文学部　教授）

博物館・美術館でのある点描

染　谷　英　五

1. 美術学生となって，彫刻を造り絵を描くことに日々を過ごした青春。つまり専門の美術教育を受けていた頃は，戦後間もない時期で書物は少く，資料は今日のようなすばらしい図版ではなかった。作品についての一面は理解できても，芸術創造を営む立場からすると，それではどうも物足りなさが残ってしまう。彫刻に眼を向け，明治以降先達が西欧に旅立ったそのことを想うだろう。

やがて泰西名画展と銘打ったフランス美術展が催されたときは，長い列に加わり胸をふくらませ博物館・美術館に足を運んだ。また東京国立博物館に仏像を主とする日本の彫刻を見に行ったりもした。そこに心と造形の融合の姿を見つけに……。

昭和34年には，フランス政府より寄贈返還された旧松方コレクションを主題として国立西洋美術館が開設され，ロダンの「バルザック」，ブールデルの「弓を引くヘラクレス」，さらにマイヨールの「イル・ド・フランス」等の作品と直接対話できるようになった。

2. イタリアを中心にヨーロッパ彫刻に関する在外研修の機会に恵まれ，大英博物館（THE BRITISH MUSEUM）やルーヴル美術館（MUSÉE DU LOUVRE）などをたずねた時，大英博物館のエドワード・スコフィルドさんは「諸彫刻は，大英博物館の古代部門のコレクションに含まれるがヨーロッパ彫刻の国立コレクションは，ロンドンのサウス・ケンシントンS・W・7のビクトリア・アンド・アルバート博物館（VICTORIA AND ALBERT MUSEUM）であると思います。もしあなたが現代彫刻に興味を持たれるならば，ミルバンクS・W・1のテート・ギャラリー（TATE GALLERY）へ尋ねられることをおすすめします」と語ってくれた。ルーヴル美術館のジャック・ティリヨンさんの「ルーヴル美術館の彫刻部門では，中世からカルポーに至る諸作品を公開しています……」というお話しなど，いろんなご好意に接したのである。博物館・美術館の広報活動に感謝するとともに，大変そのお世話になった次第である。

3. 大英博物館では，古代ギリシャ彫刻のエルギン・ルームと呼ばれる8室のドウヴィーン・ギャラリーで棒立ちとなる。初めてみるパルテノンの古代ギリシャ彫刻群。東面破風の彫刻「ペルセフォネとデメテル」「ディオニュソス」「イリス」「アムフィトリテ」などは古代ギリシャ最盛期の原作で，生命あふれる量塊は紀元前5世紀に造られたものである。美術に関心のある人ならばここを素通りできないであろう。

古代ローマ以前のエトルリア民族の地であるトスカーナ地方でのこと。糸杉が点在しブドウ畑が続く小高い丘陵地帯の町，シエーナのアルベルジョ・トスカーナに宿をとり，国立絵画館（PINACOTECA NAZIONALE）を訪れた。そこには13世紀から14世紀にかけて栄えたシエーナ派絵画がある。ドゥッチョからマルティーニに至る絵画がそれで，36室にわたっての出陳は，第1室から時の移り変りと共に展開してゆく姿が系統的に鑑賞できるすばらしい内容であった。さらにメディチ家礼拝堂（CAPPELLE MEDICEE）では，Dr. パオロ・ダル・ポジェットさんの案内で，ミケランジェロが作ったロレンツォの墓碑「夕」「曙」，ジュリアーノ墓碑「夜」「昼」の作品との対話が続く。動きに支えられた量塊の暖かい量面が美しい。

山がちなトスカーナ地方のアペニン山脈と丘陵をぬって流れるアルノ川の流域にある古くはエトルリアのまち，ルネッサンスに花開いたフィレンツェ。ピアッツアーレ・ミケランジェロから眺めた遠山，赤レンガのまちに目を移せばそこはまち全体が美術館・博物館のようなものだった。そのフィレンツェに紀元前8世紀から3世紀頃にわたって繁栄したエトルリアの美術品が収蔵されている考古博物館（MUSEO ARCHEOLOGICO）がある。エトルリア的比例感覚による石棺・陶棺・骨壺などや副葬品に眼をみはった。さらにローマには，ヴィラ・ジュリア博物館（MUSEO DI VILLA GIULLIA）があり，ボルゲーゼ公園の北端の近代美術館（GALLERIA DÁRTE MODERNA）をすぎて郊外電車の走る並木路を行くと，ルネッサンス風の石積みの建物がある。それがエトルリア美術収集館である。メディチ家出身の法王ジュリオ3世の豪華な別荘であったが，病院・学校・倉庫などに供せられた後，1919年に政府に買上げられ今日見るような姿となった。考古学者と建築家の手にかかり内装は一変し，内部には上下二段に仕切られた釣展示室などがある。「夫婦の陶棺」は円形の空間を持つ立体展示室にあり，ヴェイオの神殿を飾ったテラコッタの神像彫刻「アポロン」はヴルカが紀元前500年頃造ったものである。

ローマのテルミニ駅を背にピアッツア・デ・チンクエチエントを通り，エセドラ広場のフォンターナ・デル・ナィアディー噴水を左手にするところにローマ国立博物館（MUSEO NAZIONALE ROMANO）がある。カラカラ浴場よりも大きかった古代ローマのディナクレティアヌス帝の浴場跡は時の流れの中で変転して，今その一部を残すのみとなった。その遺跡の一部を生かしての博物館がローマ国立博物館である。そこにはヘレニズムの官能的で繊細な律動を表出している大理石彫刻・石碑・墓標や，浮彫によって飾られた石棺や祭壇彫刻などがある。美術に関心を持ち始めた頃からなれ合いになっていたヘレニズム彫刻の原作に接し，固定概念を修正せざるを得なかった。アテネの「仔牛を荷う人」，デルフォイにある「クレオビスとビトン」などのアルカイック彫刻において，人と材質との創造のかかわりあいの中で生み出された量塊形体の命に，直接ふれたときのその感動は当然のことながら，図版では得られない大きなものであった。

4. ある秋の日，フォロ・ロマーノで膚でふれるように遺跡との対面をしている老夫婦の姿を見うけた。
ギリシア文化は西にイタリアを経てヨーロッパ諸国へ，東はインドのガンダーラへと展開し，キリスト教はヨーロッパ諸国へ文化の花を咲かせた。もしインドから直接我が国に，仏教が伝わってきていたとしたら，日本の彫刻はどのような姿になっていたであろうか。もしキリス

ト教が直接伝えられていたら，おそらく今日の生活も美術（彫刻）の花の色もかなり変っていたであろう。しかし現実として，インドから中国を経て日本に伝わってきた飛鳥文化が，飛鳥彫刻が，歴史の中に位置しているのだ。あれこれと，日本の仏像の笑みを想い出してみるローマの秋の一日だった。

芸術創造を営む者にとって，営む立場からの作品との対話には追創造への一面がある。我が博物館にしてもしかり，展示物との対話というものをふまえたすばらしい発展を願う。

（教育学部　教授）

歴史史料と現地演習

横　山　昭　男

江戸時代の地方史料を使っての歴史研究がさかんになったのは，戦後のことである。それには重要な理由があった。一つは，戦中・戦前の歴史が，余りに権力者中心，政治制度中心，あるいは特定の英雄的人物中心であったのに対して，戦後における歴史の見方が国民の歴史を明らかにしようという方向に進んだためである。それは特に，近世史の部門でもっとも著しかったといえよう。それは史料のあり方と大きな関係を持っている。これが第二の理由である。つまり江戸時代に発達した地主商人が明治以降も引続き発展をつづけ，それらは第二次大戦後の農地改革まで村に君臨する大地主であった例が多い。極言すれば江戸時代の農村は，明治以後そして終戦まで続いていたのであり，近代農村の歴史あるいは農地改革の意味を明らかにするためには，近世までさかのぼって考えなければならない。その一連の史料は，特に江戸時代の名主や庄屋文書，地主文書とともに大地主の手に奥深く蔵されていたことから，農地改革以前にその全貌を見せてもらうことはほとんど不可能だったということである。

昭和20年代はじめの農地改革によって農村は変った。地主は農地を解放するとともに，家財や屋敷の処分も余儀なくされる中で，長い間所蔵してきた村方文書とともに地主文書なども一挙に公表するが，他の機関にゆずり渡す人も少なからずでてきたのであった。これが日本の農村史研究を開花させ，また地方史的研究が今日まで多くの成果をあげてきた背景でもある。もちろん，まだ未開拓の史料が数多く残っており，今後に残される課題の多いことはいうまでもない。

ところでこれらの村方あるいは地主史料は，すぐに公機関にゆずり渡されたものはともかく，その多くは旧地主の個人所蔵か部落公民館所蔵などのいずれかになっている。これまで私は地の利をいかし，特別な配慮をうけて年１～２回にわたり，史料整理を兼ね学生の歴史史料の取扱いや講読を，現地で演習する試みを行っている。以下はその一つの紹介である。

×　　×　　×　　×

日本史演習（近世）の延長として，東根市猪野沢の小山田理兵衛家文書の整理と調査を行ったのは，昭和50年夏と翌51年春の２回である。猪野沢は乱川の上流へ注ぐ一支流に沿って発達した集落で，水晶山の東北の沢を２キロ余り入ったところにある。小山田家は戦国武士の流れをくむ家柄で，戦国末期に信州から落ちのび，ここに土着したものと伝えられる。正保３年（1646）２代理兵衛以後，山形藩の大庄屋（山内８ケ村猪野沢組）をつとめ，以来支配が変ったのちも，幕末まで連綿として名主役をつとめている。現在史料を所蔵する家は小山田家の分家筋にあたり，本家は現在の猪野沢分校の敷地をほぼ屋敷にしていたが，明治10年前後に試みた猪野沢街道の開鑿事業で失敗し，没落したという。分家の当主も北海道に住んでいるため現在空家になっており，実際の管理は当家の出で谷地に住む菊田国男氏と，隣りの家に任かされている。したがって私たちの整理と調査はいつも菊田氏を煩わし，東根市の援助のもとにはじめて実施できたものである。

整理作業の内容は，茶箱６こにつめられた約1,000点におよぶ史料の一点一点にあたり，一定の分類方法に基づいてカードを作ることである。学生はまだ文書をよむことも充分でないものが多く，この機会がその訓練の場でもある。整理の段階では内容まで詳しくよむ必要はないが，未整理の史料を手にとり，少くとも表題を完全によみとるまで手離すことはできない。共同作業なので，よみ方や分類について議論も起こり，自然に史料に対して親しみがでてくる。これらは現地で，しかも未整理の史料を前にしてはじめて得られる体験である。このような経験を持つことによって，図書館や博物館のすでに整理された史料を利用する場合でも，その見方が違ってくると思われる。特に村文書の全体をながめることによって，村の史料のあり方からその村の歴史的な特徴や性格を考えてみることもできる。

現地での史料演習は史料に親しむだけでなく，合宿をして村人達に接し，村を歩くことにも大きな意義がある。その史料がどのような歴史的・地理的環境の中で作られてきたのか，単に絵図の中で地名を覚えるだけでなく，そこに足を運び現地に立って考えることは，歴史感覚を錬える上でも重要な要素だからである。

小山田家文書は，すでにこれまで散逸した部分も認められるが，近世初期以来の村役人であったことから，元

禄以前の村関係の史料が多いこと，また山村としての特徴を持っている。地主関係の史料が少いのは残念であるが，近世における山村農民の生活を明らかにする貴重な史料であり，この文書目録は東根市との共同で印刷に付しやがて刊行される予定である。　（教育学部　助教授）

バイソンからホログラフィまで

——イリノイ大学のミュージアムのこと——

米地文夫

深い毛に覆われた額の下にギョロリと眼をむいて，バイソン（アメリカ野牛）の大きな剥製が展示室の真中に立ちはだかっていた。小学一年の娘が思わず立ちすくんで，半ベソをかきながら怖いという。米国イリノイ大学の自然史博物館は，剥製やジオラマを用いて生き生きと北米大陸の自然の変遷を描き出していた。1870年代に開かれたこの館は，これら哺乳類4万点を含む動植物・地質・人類学などの標本約30万点を収蔵している。今はトウモロコシ畑がひろがり，都市が繁栄している中西部平原の過去の姿——大草原の自然に関するものが特に眼をひいた。

在外研究員として籍をおいたこの大学の中心であるアーバナキャンパスには，三つのミュージアムがある。前述の Natural History Museum（自然史博物館）のほか，World Heritage Museum（世界文化遺産博物館）と Krannert Art Museum（クランナート美術館）である。「大学のほかには何もないところですよ。」と人にいわれたとおり，アーバナは大学町で著名なばかりで見どころはない小都市（隣接するシャンペインと併せ，人口約9万人）だった。しかしアメリカンフットボールの試合をみたり，地平線に夕日が沈むのを眺めたり，それに大学のミュージアムを訪ねるのも静かな大学町での生活の楽しみの一つだった。

世界文化遺産博物館ば1911年，古典博物館とヨーロッパ文化博物館として発足したものが合体しており，シュメールの粘土板や古代ギリシャの計器類など貴重なものも多いが，息子には中世ドイツの甲冑が人気があった。東洋室には日本の仏像などもあり，古代エジプトの彫刻などはレプリカが展示されており，世界文化史を興味深くたどれるよう，あまねく資料が集められていた。

寄贈した同窓生の名をとったクランナート美術館は1961年に創立され，モダンな建物に絵画・彫刻・工芸さらには時代の最尖端であるレーザー光線応用のホログラフィ作品に至るまで多様な美術品が収められている。常時展示されるもののほか，他の美術館などの協力による特別展も次々と開かれていた。小生の滞在中にも，例えば日本の現代写真家の作品展とか，インド・ネパールの細密画展などがあり，半年前に滞在していたヒマラヤ山麓の風物を思い出し，なつかしんだものであった。

館報の第1号に工藤館長が，独立の建物を持たぬ悩みを書いておられた。さきの三つのミュージアムも講義室研究室と同居しているものの，少々事情は異なる。美術館の場合は，同館を利用する美術の講義室が併設されているのであるし，自然史博物館は，地質学など関係研究室・講義室のある建物の中心部など全面積の六割から七割を占めている。郷土博物館の居候形態に一番近いのは Liberal Arts and Sciences 学部の建物の最上階（4階）の全部を占める世界文化遺産博物館であるが，面積・人員ともにはるかに大きい。

わが郷土博物館とイリノイ大学のこれら三つのミュージアムを比較することは少々酷であり，規模や予算は問題外の違いだが，くらべて特にわが方の劣る点というのは，講義・実習のための空間確保と，一般市民の利用度とであろう。また「郷土」に限らぬ広汎・普遍的内容の充実とか興味を触発するような魅力ある展示の工夫なども必要と思われる。だがその根底には，博物館に対する理解や関心という点でアメリカとわが国の（大学そのものというよりも国や国民の）差があるのではないだろうか。

もともとアメリカ人はミュージアム好きだから，大学のそれが充実しているのも当然なのかも知れない。統計は少々古いが，1971年ミュージアムは全米に5,900館あり年間延7億人の利用者があったという。もちろんピンからキリまであり，シカゴの科学産業博物館のようにドイツのUボート（第二次大戦で捕獲したもの）やアポロ8号の実物，本物そっくりの炭坑などまるで大博覧会のようなものすごいものもあれば，普通の民家の納屋や屋根裏にあった民具類を並べただけのようなものまである。だが，戦争や宇宙競争，産業発展などの勝利の記念品よりも，むしろ祖父母の世代の平凡で素朴な生活用品への愛着や関心がアメリカの人々の心をとらえているらしい。一つ一つの展示物の前に足をとめながら，腕を組みゆっくりと歩を進める老夫婦や，展示物を指さす教師の問いにワアワアとにぎやかに答える小学生のグループ，——こういう人々に支えられてミュージアムは息づいているのであった。　（教育学部　助教授）

山形大学附属郷土博物館報　No. 3
1976. 11. 1 発行
編集兼発行人　山形大学附属郷土博物館
（〒990）　山形市小白川町1丁目4—12